

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話: 044-988-0004 (柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
第61号

日本文化の本質を知る

伊勢神宮はなぜ20年ごとに造り替えるのか

そこには深い意味が隠されていた

今年伊勢神宮で20年に一度の社殿を建て替える式年遷宮が行われ、出雲大社では約60年毎の遷宮が行われます。式年遷宮とは定められた年に社殿を建て替え、社殿内の飾り物や調度品なども新しく作り替える行事です。伊勢神宮の場合は第1回の遷宮が持統天皇4年(690年)で、今から1323年前以来20年おきに遷宮という神事が行われています。途中、応仁の乱(1467年)以降一時途切れることがありましたが、今年の遷宮は62回目に当たります。

遷宮は伊勢神宮以外でも、住吉大社・香取神宮・鹿島神宮で20年毎に、下鴨社・春日大社では21年毎に行われています。

なぜ造り替えるのか

いろいろな学説がありますが、よくわかっていません。妥当な意見としては、一定の期間毎に造り替えることによって建築技術等を伝統として残したのではないかという説があります。また三島由紀夫氏は著書「文化防衛論」の中で『木と紙によった日本の文化は、応仁の乱をはじめ過去に被った被害は数知れない。そんな中で“モノ”としての文化への固執が比較的薄くなっていったのではないか。伊勢神宮の場合、式年遷宮によって新たに建てられた伊勢神宮こそがオリジナル(本物)であって、それまで本物であった建物はその時点でコピー(写し)にオリジナルの生命を託して滅びてゆき、コピー自体がオリジナルになるのである。』(原文を要約)と述べています。

それは日本の文化遺産はその多くが木でできており、自然災害等から受ける影響は多大で、“モノ”として残すことが大変難しい環境にあったということが背景にあるようです。一方エジプト・ギリシャ・ローマなど世界的文明といわれる地域の文化遺産の多くは石で造られています。したがって“モノ”として残すことに何の躊躇もなくその意義を感じたことでしょう。

日本文化は何千年もの間に人々の生活の知恵として、“モノ”としてではなく、文化を“無形の形”として伝えることに意義を感じてきたのではないのでしょうか。“モノ”へのこだわりより、いかに文化として継承していくかということに重きを置いた証が遷宮に結びついたものと考えられます。



伊勢神宮外宮の御正殿

世界遺産に三保ノ松原・鎌倉が容れられなかったわけ

先日、富士山とそれにかかわる文化遺産が世界遺産の候補にありました。しかしその中で三保ノ松原のみ除外という条件が提示され、すっきり喜ばれない思いが残りました。一方、鎌倉は文化遺産の中に「武士」に関するものが少ないということから世界遺産候補が見送られました。

土井晩翠は壊された古城の石垣を見てふと何百年も昔の武将の姿を思い「荒城の月」という詩を作り、芭蕉は東北の野で夏草を見ながら遠く源義経の悲劇を思い起こし「夏草やつわものどもが夢のあと」の句を詠みました。日本人にとって「三保ノ松原」の景色は美の対象でした。そこには青い海と砂浜に並ぶ緑の松を背にした富士のたたずまいがあり、その組み合わせが日本人の美意識の“かたち”であったわけです。

確かに現在鎌倉に残る文化遺産を考えたら武士の面影はあまり見当たりません。でも鶴岡八幡宮を切通しを、道端にたたずむ五輪塔を見て、そして七里ヶ浜を歩いてつい自然に文部省唱歌の『鎌倉』(♪七里ヶ浜の磯伝い…)を口ずさんでしまいます。これこそ鎌倉武士を想う文化の“かたち”なのです。外国の方には分かりにくいと思いますが、“モノ”として五感に感じるものがないと存在を認識できないのではなく情緒として文化の“かたち”として日本人には感じるものの出来るものがあるのです。そのような点を外国の方々にも是非とも理解してほしいと思います。

でもいいではありませんか、世界遺産にならなくても、鎌倉や三保ノ松原には日本人にしか感じられない「美」の“かたち”がたくさんあるのです。それを大切にしていくなかで私たちにとって大事な遺産なのです。

富士山は日本一の山でいいのです。世界一の山にする必要もありません。外国人には理解できない文化の“かたち”があって当然のことです。無理やり国際化すると日本本来の良さがかえって失われてしまう恐れもあります。妥協は禁物です。

(文:板倉)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第31話

亀井六郎 ～熊野 藤白～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

登戸伊藤翁のお説に興味を持っていた私は、和歌山の海南市を訪れたことがあります。紀州和歌山といえば熊野古道と高野山で、海南市も観光に力を入れています。「下津」という町に立派な文化会館があり、その主事さんが丁寧に対応してくれました。

聞くと、紀州は木の国。その風土は耕地が少なく海洋進出の土地柄で、田辺水軍、雑賀党などを生み出し、さらに武蔵坊弁慶は田辺の人であることなど、熊野鈴木の一族が遠く東国へ進出していったことは頷けるものがあります。ちなみに有名な「紀伊国屋」は下津の出身、川崎の「さいか屋」は雑賀の出だそうです。

私の目的は亀井六郎の出自にありましたので、主事さんは資料を添えて藤白神社を紹介してくれました。藤白神社は万葉の時代、斉明天皇(655～61年)が創建したといわれ、熊野詣での一の鳥居があります。上皇、法王の宿泊地となっていた境内に今もそびえ立つ一千余年を経た大楠木がその歴史を物語っています。

訪れた私を宮司さん(吉田昌男氏)は、境内の権現堂に案内してくださいました。神仏混淆のその時代、藤白神社境内には九つの社があったそうです。仏様を本体(本地、神)とするのが熊野信仰で、仏様は人々を救うために仮に(権に)姿を現したものを権現といい、藤白神社は地元では権現(ごんげ)様と呼ばれているそうです。境内には金箔の阿弥陀如来像、千手観音像、十一面観音像などが安置され(和歌山県重要文化財)、熊野詣での歴史に改めて感銘を受けました。吉田宮司さんは元高校の先生で、熊野信仰、海南市史に関する著書があります。私が聞きたいことは熊野(藤白)と鈴木姓、亀井六郎の出自、そして源義経との関係でしたので、宮司さんは鈴木姓系譜や関連著書を譲って下さり、そして鈴木姓総本家跡、亀井地蔵を祀る専修寺、義経と六郎の墓がある浄土寺を訪ねるよう奨めてくださいました。

熊野古道脇にある鈴木屋敷は全国二百万といわれる鈴木姓のルーツで、全く荒れ果てた庭園には曲水泉(池)、義経の弓掛松(二世)というのがあります(写真右)。義経(当時は牛若丸)が熊野詣での度に藤白の鈴木家に泊まり、六郎重清と兄三郎家重(牛若丸と同年齢)と遊んだとするもので、叔父二郎重善が鞍馬の義経に臣従、六郎兄弟を引き合わせたといわれています。

専修寺は熊野古道を外れたJR紀勢本線の下にありました。鈴木家の菩提寺で五輪塔が立ち並ぶ中に亀井地蔵の堂があり、亀井六郎の地蔵を祀っています(写真下左)。地蔵は鶴は千年亀は万年、今も講中の手によって維持され、聞くとこの地には亀井姓を名乗る家が現在もあるそうです。

浄土寺は熊野古道下、祓戸(はらえど)王子跡先にありました。建治元年(1759)一遍上人が創立するこの寺は日限(ひぎり)様とも呼ばれる古刹で、境内には高さ2mあまりの2基の五輪塔、右に鈴木三郎家重、左に亀井六郎重清、そしてその間に源義経の宝篋印塔があります(写真下右)。五輪塔は鎌倉時代にこの地方の地産の石で造られ、浄土寺では文化財としてその保護に努力しておられました。訪れた時も耐震工事中でした。

参考文献:「海南市史」「海南市観光ガイド」「藤白初山踏(吉田昌男)」



「塚」を訪ねて(5)

片平の「富士塚(ふじづか)」とは？

世界遺産認定の背景にある人々の篤い信仰

川崎市内の「富士塚(ふじづか)」は主なものだけで14ヶ所あります。中には消滅したものや忘れ去られたものもあるようです。麻生区内では片平・金程の後谷・早野・黒川汁守神社裏の4か所にあることが分かっています。ただ黒川のは消滅してしまっているようです。全体的には昔はもっとあったのではないかと考えられます。

さて、片平の「富士塚」は江戸後期に編纂された新編武蔵風土記稿片平村の項によりますと、『村の西にあり、その由来を伝えず、二間(約 3.3m)四方ばかりの塚なり』と書かれていますので決して大きい塚ではないようです。右の写真で丘の頂上付近が片平の富士塚です。昔はこの位置からよく富士山が望めたのではないかと思います。



片平の富士塚

富士塚はもともと中世室町時代からその基になるものがありました。室町時代の『鎌倉年中行事』(著者:海老名季高)に「飯盛山の富士」「富士御精進」等の記述があり、江戸時代に絶頂期を迎える「富士塚」の前兆がすでに登場していたようです。

富士塚が一般庶民に広がり始めたのは江戸時代中期の安永8年(1779年)、高田藤四郎が「高田富士」を築造して以降でした。



昭和57年頃の小机の富士講中

8代将軍吉宗の頃、享保の改革や享保の大飢饉で打ち壊しや一揆などが頻発し社会不安に陥ります。そのような状況を見て油商人の食行身禄(じきぎょう みろく=本名:伊兵衛)は富士山で幕府に対する抗議の断食をおこない、そこで亡くなりました。自分の命と引き換えに民衆を救おうという思いの一部始終が江戸の街に伝わると、たちまち人々の心を捕らえました。これをきっかけに「富士信仰」の基礎が出来上がり、信仰を支える「富士講」という組織も出来上がりました。当時幕府はこの新興宗教団体を弾圧しましたが、民衆

レベルの組織力は年々強固となったようです。

やがて食行身禄の弟子であり、富士登山の熟練者であった高田藤四郎が総指揮をとって信者を総動員し、新宿区西早稲田二丁目付近に高さ10mにも及ぶ第1号の「富士塚」を造り、富士信仰の土台を創り上げました。一般的に富士塚は富士山が見える見晴らしのいいところで、多くの富士山の溶岩が配置され、頂上付近には「浅間神社(せんげんじんじゃ)」の祠(ほこら)を安置していることが多いようです。



横浜鶴見区の鶴見神社境内にある富士塚

この富士塚に関する富士信仰の大本は山岳信仰で、御嶽信仰とも深いつながりがあります。富士山に初めて登頂した人物は7世紀修験道の創始者である「役の小角(えんのおずぬ)」だとの記録があります。

修験道の存在は柿生に多く見られます。片平の富士塚近辺には修験道に関係深い御嶽神社があります。また江戸時代後期に編纂された新編武蔵風土記稿には片平村の隣の栗木村の項に修験者が修業をした和合院という庵が村の南にあると記しています。土地の人々も栗木村に「ホーエンサマ(法印様)」と呼ぶ修験者の庵(いおり)があり、修験者の墓所とも思われる7基の塚もあつたとの伝承が残されています。(文:板倉)

柿生郷土史料館の活動にご支援いただいている法人をご紹介します

☆☆☆柿生郷土史料館友の会法人会員(5月10日現在)☆☆☆

- ★月読神社 ★琴平神社 ★王禅寺 ★常安寺 ★浄慶寺 ★麻生総合病院 ★フィッシング王禅寺
- ★多摩日吉台病院 ★川崎信用金庫柿生支店 ★JAセレサ川崎 ★志田電子製作所 ★朝日ホーム
- ★柿の実幼稚園 ★柿生保育園 ★アルナ園 ★観財 ★栄和 ★柿生恒産 ★孝友商事 ★大平屋
- ★かじのや ★ゲオホールディングス ★リック設計企画 ★青戸建材店 ★スズユウ商事 ★広東商事
- ★ノジマ NEW 鶴川店 ★丸和企画印刷 ★プライマリー ★石野電気柿生店 ★とん鈴 ★尾作住宅
- ★尾作材木店 ★奈良工業 ★北島工務店 ★粕谷住宅資材 ★ティーエムコーポレーション ★松屋
- ★ガスト柿生店 ★小料理わかば ★レストランベル

(順不同・敬称略)

川崎の講を考える(2)

今、なぜ講なのか

「オオカミの護符」の著者、小倉美恵子氏は最近の著作の中で『東日本大震災を機に、それまであまり関心を示さなかった若い世代が“講”の姿に自分たちが生まれ育ってきた社会とは全く異なる日本の姿を見たというのです。そしてその姿の中に今まさに切望する“人の絆”と“自然との関わり”を築くための手がかりがあることが分かりました。』と記しています。

ところが20代の若者が注目し始めた地域社会は、今や次世代へバトンタッチを働きかける世代自身が、かつての村の生活を忘れ去ろうとしているのです。その背景には戦後社会の急速な近代化により前近代的なものは「悪である」かのごとく錯覚を、社会全体が持ってしまうことがあるのではないのでしょうか。

ヨーロッパ社会ではゆっくりとした時間の中で、伝統と文化を社会全体が十分咀嚼(そしゃく=物事をよく考え意味を理解すること)し、継承しながら調和のある生活をしていることが多いように感じます。小倉美恵子氏は亡き祖父の姿を知ることにより、自分の知らない村の姿が浮き彫りとなり、『村の歴史が体温を帯びて立ち上がり、内なる思いがあふれ出てきたのです。』と語っていらっしやいました。さらに『土着の文化を身に宿し、表現できることは、むしろ地域や国境を越えて共感しあう真の国際化のためのパスポートになりうることを実感し始めています。』と述べられています。すなわち自分の足元の歴史・文化をまずはしっかりと知り、祖先の思いを心で感じることから始めなければならぬのではないかと思います。 参考資料:「土にかえす訓えを胸に」(文:板倉)

柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日:偶数月は土曜日、奇数月は日曜日

6月 8・15・22・29日(1日を除く毎土曜日) 注:6月1日は休館です 7月 7・14・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

柿生郷土史料館6～7月の催物のご案内

第3回 実物のミニ歴史資料展 (6月)

「活版印刷技術が世界史を変えた!」

主な展示資料 『フランス14世紀羊皮紙手書き時祷書』『15世紀活字印刷(インキュナブラ)の時祷書』『16世紀聖書』『イタリア1745年のグレゴリオ聖歌集』 他

内容 15世紀半ばドイツのグーテンベルクが発明した活版印刷機は人々の情報量を飛躍的に伸ばすことになりました。このことが16世紀の宗教改革、17世紀から始まった市民革命など世界の様子が一変するきっかけとなりました。今回は発明以前の羊皮紙による聖書、発明から約20年後に印刷(インキュナブラ)された聖書や1500～1600年代に作成されたヨーロッパの資料を展示いたします。

公開日 6月 8・15・22・29日(1日を除く毎土曜日)

第41回 カルチャー・セミナー

川崎市教育委員会・麻生区役所・宮前区役所後援

川崎ふるさと再発見 そして未来へ! プロジェクト第1弾

シンポジウム 「御岳講フォーラム」

・パネラー: 小倉美恵子氏(ささらプロダクション、「オオカミの護符」著者) 由井 英氏(映画監督、「うっし世の静寂に」制作) 服部博美氏(御岳神社御師)、服部一喜氏(御岳神社御師)

・日時: 平成25年6月22日(土) 午後1時～

・会場: JAセレサ川崎柿生支店 3階ホール

・内容: *オオカミの護符が発信しているメッセージは何か *村人にとって御岳講とは何だったのか、人々とのつながりとは



第4回 実物のミニ歴史資料展 (6月、7月)

「幕末海防への世論と発禁本」

主な展示資料 『戊戌夢物語(高野長英著)』『海外新話(嶺田楓江著)』『海国兵談(林子平著)』

内容 ・幕末、日本の庶民は中国で発生したアヘン戦争など海外事情を知っていたのか? ・これらの書物はなぜ発禁となったのか?

公開日 7月 7・14・21・28日(毎日曜日) 8月 3・10・17・24日(毎土曜日)